

## 2001年9月11日の朝

私と札幌近郊・江別市の機械屋さんと米国人ホブの3名で、米国ミネソタ州北西部にあるローズルという町に向かった。その日の朝はレンタカーで滞在していたファアゴから、だだっ広いプレーリーと呼ばれる大平原を北上した。

カナダ国境に近づく、1マイル間隔で見ることができた農場がもつと少なくなり、栽培している作物もひまわりやビートが目につくようになった。ほぼ直線の片道4車線で利用できる道路を余裕の2車線で運用できる余裕はありがたい。

制限速度は時速75マイル(120km)だ。アイダホ、ワイオミングなどは丸善石油オー・モレツの時速80マイル(129km)だが、あくまで飛行機と同じ対地速度の話で、車中は何の変化もないワン・グレビティの世界だ。

この道路を作るのに1マイルあたりのコストはどのくらいになるのだろうか? 全米に張り巡らされたインターステート(州間高速道路)は日本や中国が買った米国債や米国民の税金からできている。地域の一人当たりの恩恵度を考えたとき、日本の大都市であっても地球儀上では未だ虚勢を張った豊かさを2世代に渡って経験していない極東の田舎だ

と感じることが多い。

ファアゴを出て1時間くらいして、自宅から連絡が入った。

「あなた、大変なことになってるわよ!」

どうせ誰かが皇居・二条橋の前でポキートな4インチぶら下げたストリーキングでもやったのか、くらいに思ったがそうではなかった。NYのWTC(世界貿易センタービル)に飛行機が2機突っ込み、日本の深夜のTVでもこれはテロに間違いないと連絡が来たのだ。数分して、ホブの奥さんからも同様の電話が入った。

しかし不思議なものだ。米国内でも北海道のほうから早く電話が来たのだから。そういえば逆のケースもあった。93年7月12日の深夜にLAの知り合いから「ミヤ・イ・さくん、大丈夫ですか?」と電話が来た。寝ていたが、言われるままにTVを付けると地震があり、津波などで200名以上の犠牲が出た北海道・奥尻島のことだった。ファアゴを出てからラジオも付け

## Vol.76 ラジオでそう言っているじゃないか!



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

ないで、MBAを持っているブッシュ大統領はマトモかどうかなどと話していたので、外界とのやり取りはゼロ・グレビティの宇宙船状態だった。ラジオを入れると局を選ばずともNYの緊迫した状況が伝わってきた。ただテロがあったとしてもこの北のプレーリーを車で走っていると緊迫感や緊張感は全くなく、ホブも今までNYに行く理由はなかったので、ま

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

るで中近東のテロ話に聞こえた。  
**ラジオからは悲惨な状況と共にメキシコ国境が閉鎖されたと伝えられている。しばらくするとカナダ国境が閉鎖されたと言っていた。**

## 「再入国は保障できない」

車はカナダ国境手前の州道を東に80マイルほど行ったところでローズルに着いた。この人口1万7000人の町は雪を愛する北の人間には聖地のような町だ。日本製のエンジンにリバースギアも付いたハイテク・マシーンであるスノーモービルのボリス本社があり、最近では4輪の多目的作業車も作っていて、この会社の重役の所有する畑に関することで訪れることになったのだ。

事務所に着くとTVスクリーンにはWTCが崩れるシーンが映し出されていた。このテロでは3000名以上の方が犠牲となった。その中には24名の日本人がいて多くはビジネスマン戦士だ。戦士だから米国勤務が決まったときに銃の使い方は学んだとしても、まさか飛行機が突っ込んでくる準備はできていなかったのだから。

たとえ首謀者ウサマ・ビン・ラデーンを海軍のシールズ・チーム6が9mm弾で処置し、水葬されて微生物や魚と貝の餌になったところで、その

地方の水産物を輸入しない米国に対するテロ攻撃が今後なくなると考えられるテロリストは存在しない。ではどうすれば良いのか？ 簡単だ、世界平和のためにコルト社ピースメーカーと呼ばれる6インチ・バレルの45口径から発射される鉛の弾を、ぶち込み続けるのがお互いの共存共栄になるのだ。

ローズルの用事も済ませ、翌日はさらに北のカナダ・ウイニペグ近郊の乾燥泥炭収穫畑（ピートモス）を訪ねる予定で、午後遅くローズルの真北10マイルにあるカナダ国境を目指した。普段なら米国側からは勝手に出国しても問題ないのだが、次日には米国に戻る予定だったので、念のためテロで入国に関して規制しているかどうか、ボーダーパトロールに尋ねると、「**出国は自由だが、明日入国できるかどうかは保証できない**」と言われたのだ。

何かヤバそうなので、ボブと話をして10マイル西にある別の国境に向かうことにした。ここでも、米国のボーダーパトロールと同じ質問をすると「**再入国は保証できない**」とやはり同じことを言われた。ボブはどうするか悩んでいたが、私はさらにこのように聞いた。

「ところで誰が再入国は保証できないと言っているのか？」

すると、「ワシントンからの指示は何もないが、**ラジオで国境閉鎖だ**って言っているじゃないか！」とボーダーパトロールは真顔で答えた。こりゃ問題ないと米国からカナダに入国した。呆れた、まるでラジオ全盛時代のオーソン・ウェルズの火星襲来と同じレベルである。

残念ながら米国側のボーダー事務所はカナダ側よりも貧相である。木の造の事務所にあるのは電話とFAXのみでパソコンはなかったと思う。それに引き替え、カナダ側はコンクリート造りで、会話は防弾ガラス越し。ボーダーパトロールが防弾ベストを着用しているという事は、カナダ人は米国人を信用していないのだろうか。

入国後、さらに1時間ほど北上してウイニペグを目指し寝床を探した。郊外に新築されたばかりのチェーン店のスパー8が見つかった。受付に行くとき典型的なカナダの金髪・ブルーアイが対応してくれた。

おかしなことに駐車場はガラガラなのに部屋を貸せないと言う。さう困った。カナダ人のいつもの嫌がらせか？と思つたら、なんでもテロの影響で米国に国際線の飛行機が着陸できないので、長い滑走路があるこのウイニペグに多くの乗客が到着するので、部屋を空けておくようにマ

ネージャーから言われているとの説明を受けた。たまたまその時にマネージャーがやって来て、宿泊OKとなったのだが、確かに翌日の新聞にはウイニペグ飛行場に所狭しと世界中の飛行機が駐機してあった。

カナダでの用事を済ませ米国に向かうと、カナダ側はフリーパスで出国させたが、米国側は我われ日本人の**スーツケースを隅々まで検査**した。その横でパスポートも運転免許書も見せずに入国したボブはボーダーパトロールと世間話をしていった。

当時は米国人、カナダ人はパスポートを所持していなくても口頭もしくは運転免許書でお互いに入国できたが、現在はパスポートが必要となった。このようなことも**TPPで人の流れがスムーズになる**のか興味のあるところだ。

日本国憲法では千代田区一丁目1(皇居)に本籍を写すことは可能だ。NYのテロがあったグラランド・ゼロは祈念モニュメントになるが、700億円の被害があったとされる奥尻島・青苗地区の住民は元居た場所の再定住を希望する者がいると聞く。もちろん奥尻だけの話でないことは誰でも知っている。そんな方たちにはもつと素晴らしい本籍地を与えましょう。**東京都港区赤坂1-10-5(米国外使館)はいかが？**